

山形県 県史だより

第4号

山形県総務部学事文書課分室 県史資料室



新庄市に設置された農林省積雪地方農村経済調査所の施設全景。昭和34年撮影。写真は雪の里情報館所蔵。

当時、農家の窮乏化は小作農に限らず、自作農にも同様に及びます。中でも、深刻な社会問題として騒がれたのは「娘の身売り」です。全国でも長野県と山形県が他県を抜いて深刻で、最上地方の某村などは「乙女のいない村」とまで新聞に書きたてられました。

このような農村の危機的状况に対して、「東北農村を救え」との世論が広く起ります。この

積雪地方農村経済調査所（略称、「雪害調査所」または「雪調」）は、昭和八年、国が新庄町に設けた全国唯一の雪に関する調査・研究・指導機関です。このような機関が、この時代、設置されたことについては、主に二つの要因が考えられます。一つはこの時代、雪国地方の農山漁村がおかれた経済事情、二つは本県楯岡町（村山市）出身の政治家松岡俊三の雪国救済運動（「雪害運動」）です。

特別寄稿 新庄に設置された日本初の雪の研究機関

積雪地方農村経済調査所

最上地域史研究会会長 大友義助

声におされて、政府は昭和七年、かなりの規模の救農土木事業を興すことを決め、農村経済の「自力更生」を標語に、運動を展開します。また、この年、政府は雪国農山漁村の経済更生を期すため、内務省に「雪害対策調査会」を設置しましたが、この設置には代議士松岡俊三の力が大でした。

松岡の雪国救済運動の第一声は、昭和二年、尾花沢町で開かれた北村山郡小作組合総会で挙げられます。彼の主張は多くの聴衆の共感を呼び、中でも、新庄町の革新的な青年たちの感銘が深く、翌年一月、新庄で「松岡代議士雪害大講演会」が開催されます。彼等は「新庄町青



衆議院本会議で演説する松岡俊三。
写真は県史資料室所蔵。

年革新同盟」を組織していましたが、この講演を機に、最上郡町村長会、郡農会等呼びかけ、「最上郡雪害救済期成連盟」を結成、松岡を支援するようになります。後に、雪調の新庄町誘致を主張したのも、この組織でした。「東北農村の窮乏の真の原因は過度の積雪である。雪はまさしく災害である。災害であるからには政府はこれを救うべく全力を尽さねばならぬ」との松岡の主張は、雪国地方に広く深く受け入れられ、彼の運動は、山形県を中心に、北海道・東北・信越地方にも広まりました。

松岡の「雪害調査機関設置に関する建議案」は、昭和四年三月、衆議院を通過します。しか



積雪地方の住宅として設計された実験農家。
写真は雪の里情報館所蔵。

し、松岡は、実現に努力しない政府の態度に怒り、翌年四月、早急な対策樹立を求める建白書を起草して全国の要人四千人に送付し、四万人の請願書を貴衆両院へ提出します。その結果、五月にこれが貴族院で採決されます。

同年十一月、松岡は雪害運動の一層の拡大強化をはかるべく、東北地方一円と北海道への遊説、「雪国行脚」を開始しました。深い雪の中、また猛烈な吹雪の中の行脚は、しばしば身の危険を覚える難行でしたが、彼は、各地の地主・農民・地方政治家を訪ねて運動の趣旨を説き、講演会を開いて運動を推進しました。この遊説によって、最上郡雪害救済期成連盟・山形県正道会など、新たな松岡支持が誕生し、活発に声を挙げます。

昭和七年、松岡は第六三回帝国議会で、雪害対策調査会設置など三点を質問し、これを政府に確約させ、翌年五月、「積雪地方農村経済調査所」の設置が決定されました。

かくして設置された雪調は農林省の所屬とされ、職員は、農林技士山口弘道を所長に、属一名、技手二名、嘱託二名、雇員六名が任命されました。雪調の使命は、単に調査・研究にあるのではなく、その成果を一般へ周知させ、伝習会を開いて知識・技術を修得させることにありとされました。

雪調における調査・研究の中でも後世まで高く評価される画期的な業績の第一は、積雪の調査研究です。これは、調査所自体が実施した雪国地方全域にわたる綿密・詳細な積雪の分布調査と、調査所が、外部の学者・研究者・実務者などに委託して行った積雪の分類・名称に関する調査研究の二つに分けられます。

第二の業績は、雪国地方の農家住宅の改善です。雪調において、主にこの任に当たったのは、早稲田大学の建築学者今和次郎です。雪国における農家住宅の改善は、当時は、国家的要請とも言つべき重要問題でした。身売りした娘たちが肺結核におかされて帰る故郷の生家は、冬季は、雪が屋根よりも高く、真つ暗で排煙設備がなく、肺結核はたちまち家族に伝染します。このことに最も危機感を抱いたのは旧陸軍でした。寒さに強い東北地方出身の若者が、肺結核で失われることは重大な問題でした。国は盛んに生活改善運動を進めますが、雪調が担った農家家屋・畜舎・作業場の改善の背景にはこのような時代の要請がありました。

第三の業績は、農家副業の開発、振興についての調査研究です。具体的には当時新興の民芸運動と提携しての調査研究等が挙げられます。雪調の調査項目に、「副業的原始生産及び加工に関する事項」があります。雪国地方農山村で

行われている藁工品・竹細工・蔓細工、缶詰・瓶詰加工販売等の副業についての調査・研究を推進し、これら副業の開発の振興の方途をさぐり、農家窮乏の危機を救えという趣旨の項目と理解されます。山口所長は、この調査を自身も行いますが、加えて、新興の民芸運動の創唱者柳宗悦に依頼しました。山口所長の依頼による民芸品調査は、雪調の所在地である最上地方を皮切りに、県内のみならず、東北地方各地に及びます。また、民芸品展覧会が県内各地で開催され、東北各県県都に広がり、さらには新案民芸品の開発・創作を得るための伝習会開催に発展して行きます。

これら雪調や先人の業績は、現在ほとんど忘れ去られている感があります。しかし、大雪に見舞われた最上地方の姿や現代農村の危機的状况を見るにつけ、改めてそれらを顧みることの大切さを痛感しています。

雪調が収めた顕著な業績の詳細は、『山形県地域史研究』第四十号所収、大友義助「積雪地方農村経済調査所について 民芸運動との関連を中心に」（大会講演）を参照してください。



雪の里情報館の一部として現存する旧農林省積雪地方農村経済調査所の建造物。



積雪地方農村経済調査所の跡地に平成9（1997）年に開館した「雪の里情報館」（新庄市）。

統計資料

明治期の地域医療従事者

今、県内では、医者がいない地域の医療活動に生涯を捧げた女医を取り上げた映画「いしや先生」の撮影が進み、その上映が待たれています。モデルとされたのは、昭和十（一九三五）年から同三十七年まで、大井沢村（現、西川町）で、住民の病と向き合い、健康づくりに尽力した志田周子女医です。彼女が医者への道に進んだ背景には、幼児期に母を亡くした父親の「無医村」解消；「地域医療」実現への強い思いがありました。

「地域医療」という言葉は、一九七〇年代ころから定着したと言われますが、医療を地域的な視点でとらえる動きは、近代医療が始まる明治期からありました。

明治七（一八七四）年、明治政府は、医療制度や衛生行政に関する各種規定を定めた全七六条からなる医制を發布します。この制度

で、衛生行政機構の整備と医学教育の確立を図り、医術開業試験制度を樹立すると同時に医療関係者の免許制度を施行し、薬舗制度を設け医薬分業制度を実施するなど、近代医療の基礎固めをおこないます。翌年「医術開業試験」が布達され、山形県でも「従来開業医」の調査が命じられ医師名届けがなされて行きます。やがて、医師開業試験が進む中で、「従来開業医」の免状交付を同十三年末で打ち切りとし、以後は免状交付を医学学校卒業が試験によるものとしします。

一方、同十四年、山形県は、郡医および町村医の設置方法について布達し、彼らに地域の「窮民救済」に当たらせ「伝染病予防等」の処理をさせることとします。この郡医は県会、村医は町村会の公選により委嘱されました。

医制が始まった明治期の医師は県内にどのくらい存在していたのでしょうか。明治十一年の調査（同十二年刊行『山形縣治一覽表』）では、洋方医二八六名・漢方医三五

八名、合わせて医師（内外科）六四四名とあります。また、『明治十三年山形縣統計表』には、郡別の医業免状数があり、その集計数は、洋方医三二〇・漢方医三二八・神方医二・眼科（專業）医二〇・外科專業医二・種痘専門医一・雑科二四・産科四・産婆一六〇・整骨医四・鍼治医一五九・灸治医四七・按摩按腹一八三・獸医一四・馬医一八・薬舗七一・売薬八五・売薬請売三〇八・売薬行商四六で、合計一七七六になります。さらに、『山形縣統計書記載の医師数郡市別に記載』の推移を表したのが表1です。初めは「内外科」と「専門」に分けた集計の仕方をしていましたが、同三十五年からは調査方法が変わり、学卒・試験・従来開業の内容を細分化しています。作表にあたってはそれらを一部統合しています。

ところで、冒頭の「無医村」問題や「地域医療」の歴史を考えると、これら明治期の医師をさらに地域別に見ていく必要があります。

表3は、明治三十年刊行（調査は前年）の『一市三郡区民必携』（山形市・南村山郡・東村山郡・西村山郡）と同三十一年刊行の『最北二郡公民必携』（北村山郡・最上郡）、『庄内三郡公民必携』（東田川郡・西田川郡・飽海郡）から医療従事者を抽出したものです。これら三資料（渋谷隆一編『都道府県別資産家地主総覧（山形編1）』所収）は、いずれも茨城県内の宮内新蔵の編集によるもので、各郡の「諸名家」の収録人員は、三資料合わせて約六〇〇〇名に及んでいます。抽出した医療従事者は、同時期の『山形縣統計書』の医師数（表2）で確認すると、その四分の一弱にしか当たりません。しかし、これら村ごとの医療従事者の存在を通して、地域医療史の糸口をたどることができそうです。地域医療従事者の存在をさらに掘り起し、無医地区の抱えた問題や、医療の知識・技術や施設・設備が影響した地域医療史に迫ることは、今後の課題とされます。

（山内 励）

表1 『山形縣統計書』に見る医師数の推移 (単位は人)

年	合計	医学士 (内外科)	卒業 (内外科)	試験卒業履歴 (専門)	試験 (内外科)	履歴 (内外科)	従来開業 (内外科 + 専門)	医師1人につき 人口(1)
明治17年	627		10		26	8	583	
明治18年	661		17	2	37	16	589	
明治19年	668		17	3	40	17	591	0.92
明治20年	666	1	19		46	15	585	0.91
明治21年	621	1	19		55	13	533	0.83
明治22年	616	1	24	2	68	12	509	0.82
明治23年	624	1	29	2	76	12	504	0.82
明治24年	634	1	33	2	90	11	497	1,211
明治25年	643	2	35	4	97	13	492	1,207
明治26年	642	4	39	4	104	14	477	1,219
明治27年	646	3	40	4	121	13	465	1,221
明治28年	652	3	39	6	128	13	463	1,225
明治29年	622	4	42	7	122	12	435	1,300
明治30年	588	3	43	8	146	12	376	1,394
明治31年	569	3	44	7	154	11	350	1,455
明治32年	605	4	49	8	168	11	365	1,385
明治33年	600	3	50	7	183	12	345	1,412
明治34年	563	20	33	9	195	12	294	1,541
年	合計	大学卒業	専門学校及 高等学校卒業	府県立学校 卒業	試験及第 (2)	奉職履歴	従来開業 (3)	医師1人につき 人口
明治35年	596	20	43	9	230	12	282	1,474
明治36年	597	20	46	8	238	12	273	1,469
明治37年	602	24	45	10	248	12	263	1,456
明治38年	593	23	47	11	270	12	230	1,492
明治39年	608	26	55	13	269	12	233	1,482
明治40年	610	24	49	29	276	13	219	1,493
明治41年	578	22	66	6	262	18	204	1,576
明治42年	559	18	74	9	254	11	193	1,541

1 明治23年までは、人口1,000人につき医師の比例 2 「舊試験及第」を含む 3 「従来開業医子弟」「限地許可」を含む

表2 『山形縣統計書』に見る明治30年の医師数 (単位は人)

郡市名	合計	内外科						専門			医師1人につき 人口
		総数	医学士	卒業	試験	履歴	従来開業	総数	試験卒業 履歴	従来開業	
南村山郡	26	21		3	1		17	5	1	4	2,415
東村山郡	45	14		3	7		4	31		31	1,862
西村山郡	48	42		7	12	1	22	6		6	1,597
北村山郡	50	21		2	12		7	29		29	1,810
最上郡	33	14		1	8		5	19		19	1,852
飽海郡	77	34		2	12	3	17	43	3	40	1,184
東田川郡	39	19		1	11		7	20		20	1,983
西田川郡	80	58		9	24		25	22		22	961
西置賜郡	50	48		4	14		30	2		2	1,101
東置賜郡	48	47		3	17		27	1		1	1,384
南置賜郡	10	10			2		8				2,496
山形市	41	34	2	4	15	3	10	7	3	4	786
米沢市	41	34	1	4	11	5	13	7	1	6	766
合計	588	396	3	43	146	12	192	192	8	184	1,394

市町村名	職業・肩書・(身分)等	氏名	生年
南村山郡			
1 南沼原村	医師	鈴木三英	天保13年
2 柏倉門伝村	医師	高橋三治	慶応2年
3	医師	井上道意	嘉永3年
4 堀田村	医師	井上玄龍	文政7年
5	医師	吉田亮庵	天保9年
6 瀧山村	医士	平清水仲	天保2年
7 山形市	酸性硫酸薬部外金銅製造、旅館屋	高橋善介	嘉永5年
東村山郡			
8 大寺村	医士	武田隆元	天保14年
9 最上村	医師	晋道伊代造	安政3年
10	医師	齊藤榮庵	明治3年
11	医業	高橋正得	文久2年
12 天童町	医、(士族)	高橋正玄	天保9年
13	医	坂口格太郎	慶応2年
14 金井村	医師	松尾元亮	天保4年
15	医師	松尾秀朔	嘉永元年
16 干布村	医師	今野有石	安政4年
17 津山村	村医	山口良安	天保8年
18 蔵増村	医士	前田桂郎	明治3年
19 高夕又村	医師	高橋雄齋	安政2年
西村山郡			
20 溝延村	医師	若木文龍	天保9年
21 谷地町	医師	長登廣治	安政6年
22 柴橋村	薬種	真木與吉	慶応3年
23 醍醐村	医師	北條昌吉	嘉永5年
24	医師	菅一學	天保13年
25 三泉村	神養丹・経養丸製造	後藤小左衛門	弘化元年
26	医師	松田玄清(空白)	
27	医師	高橋禮藏	明治7年
28 白岩村	医師	賀川孤山	天保4年
29	医師、医学得業士	奥山立宇	慶応3年
30 西山村	医師	武田環	明治2年
31	医師	井場秀雄	弘化2年
32 川土居村	医師	荒木健雄	文久元年
33 左沢町	医業	瀧口昌水	嘉永2年
34 大谷村	医師	白田豊津	嘉永5年
35 七軒村	医士	稻村駒吉	明治元年
36 東五百川村	医師	上村音次郎	文久3年

市町村名	職業・肩書・(身分)等	氏名	生年
北村山郡			
37	医師	後藤俊庵	安政5年
38	医師	阿部恒治	慶応2年
39 橋岡町	医師	大類卓造	文久元年
40	薬種商	高宮吉之助	安政4年
41	開業医	結城 勇	嘉永3年
42	医師	大内仙造	嘉永4年
43 大倉村	医	金谷春男	弘化元年
44	医師	赤松徳太郎	安政2年
45	医、北村山郡医	中目顯俊	安政6年
46 東根町	開業医、仁天堂	深瀬洞吉	明治5年
47	開業医、陽春堂医院	大泉水也	嘉永5年
48	医	松田春龍	天保12年
49 東郷村	獣医畜産家	名和直助	明治6年
50 大久保村	医士	松田元安	嘉永元年
51 戸沢村	医	佐藤貞庵	天保12年
52	医	松田本治	明治元年
53 大高根村	医	松倉金太郎	元治元年
54 大石田町	医師	田中 豊	安政5年
55	医師	後藤源太郎	文久2年
56	薬種商	柴崎小野吉	安政5年
57 尾花沢町	医	榎本静海	嘉永5年
58	医	菅野賢齋	天保9年
59 宮沢村	獣医	杉本利左衛門	嘉永5年
60 常盤村	医	佐々木壽珊	明治6年
61	医師	佐藤良順	嘉永元年
62 山口村	医師、神職	原 正人	天保元年
63	医師	後藤良達	天保6年
最上郡			
64	薬店	遠藤貞治	安政3年
65 新庄町	医師、(士族)	熊谷 晋	文久2年
66	医士、(士族)	牧 昌吉	明治2年
67	医士	門脇良安	慶応3年
68	医士、(士族)	大澤銚三郎	文久3年
69 舟形村	医士	星川元友	安政5年
70 堀内村	医、(士族)	戸塚岡謙	安政5年
71 大蔵村	医	海藤浩安	安政元年
72 角川村	医	伊藤昌安	嘉永3年
73 戸沢村	医士	熊澤 東	安政元年
74	村医	眞下元順	嘉永6年
75 豊里村	医	栗田見純	慶応元年
76 金山村	医士	丹 記謙	天保12年
77 東小国村	村医	上野了貞	天保14年

市町村名	職業・肩書・(身分)等	氏名	生年
東田川郡			
78 藤島村	薬種商	今野治郎右衛門	安政5年
79	医師、(士族)	鳥海恭寛	文久2年
80	医師	石川佐之助	万延元年
81 狩川村	医師	石川寅記	安政元年
82	獣医	乙坂巳之吉	明治2年
83 押切村	医師、押切村医、学校医	加藤道専	嘉永4年
84 長沼村	医師、長沼村医兼学校医	大沼元齋	弘化2年
85	医師、村医	吉泉岱嶺	天保12年
86 栄村	医師	本間貞治郎	嘉永6年
87	医師	遠藤 昇	弘化2年
88 新堀村	医師、医学得業士	加藤孝五郎	慶応3年
89	医師	伊藤寛治	文久3年
90 余目村	医師	平井貞藏	文久3年
91	医業	菅原敬齋	弘化元年
92 東栄村	医師	金内元太郎	慶応2年
93 齋村	獣医	大井孫太郎	慶応2年
94	医師	吉川岩太	慶応3年
95 山添村	医師	佐久間順適	弘化元年
96	医業	上野玄冲	弘化2年
97 広野村	医業	安藤 寛	安政2年
98	医師	佐藤了伯	嘉永2年
99	医師	坂野源三郎	明治8年
100	医師	阿部正順	安政7年
101 広瀬村	医師	岡部覺盈	弘化元年
102 黒川村	医師	坂尾仙吉	安政3年
西田川郡			
103 大宝寺村	医師、村医、小学校医	柏倉皆人	天保9年
104	医	日下部宗林	嘉永6年
105 念珠間村	医	佐藤元俊	慶応3年
106	医、医学得業士	本間政廣	明治8年
107 温海村	開業医、温海村医	竹田忠三郎	明治3年
108	開業医、温海村医	長谷川玄伯	天保6年
109 豊浦村	医師	浦川周司	安政3年
110 上郷村	獣医	五十嵐衛三郎	明治6年
111 東郷村	医師、(士族)	菅原重孝	文久元年
112 大山町	医師、(士族)	栗本慶次	慶応3年
113	医師	秋野庸彦	天保12年
114 西郷村	医師	荻原昌雄	万延元年
115 神浦村	医師	瀬津致格	明治3年
116	医師	佐藤秀達	天保9年
飽海郡			
117	医師	松浦謙吉	天保12年
118	薬剤師、銃砲火薬	小池榮藏	安政元年
119	医師	大平慎作	安政元年
120	医師、(士族)	伊藤兼明	明治3年
121	医師	佐藤 廣	安政元年
122	医師	市川元泰	安政2年
123	医師、(士族)	石川正治	文久元年
124 酒田町	医師	田邊良作	慶応2年
125	薬舗	白幡平太郎	明治5年
126	医師	長堀 佐	嘉永元年
127	医師、齒科	池田英齋	安政3年
128	齒科	川島定吉	慶応元年
129	医師	三浦常徳	安政元年
130	薬舗印版舗	齋藤富吉	慶応元年
131	齒科医	齋藤荒之助	安政5年
132 西荒瀬村	医師	大川周賢	(空白)
133	医師	渡邊宗榮	安政3年
134 内郷村	医師	石黒宗悦	天保10年
135 南平田村	医師	後藤玄格	嘉永5年
136	医師、(士族)	野田宗員	明治3年
137 東平田村	医師	三浦元察	天保9年
138	医師	小野寺祐賢	弘化2年
139 観音寺村	医師、(士族)	佐藤 勉	嘉永元年
140	医師	岡野玄達	嘉永3年
141 一椽村	医	村上龍助	安政元年
142 中平田村	村医	阿部雲庵	天治(マ)11年
143	医師、郡医	門山周賢	嘉永2年
144	医師、(士族)	九米井才三	元治元年
145 松嶺町	医師、(士族)	高橋準藏	嘉永元年
146	医師、(士族)	澁谷朋信	安政4年
147	医師	大井玄節	天保11年

表3 『公民(区民)必携』に見る
明治期地域医療関係者一覧

「職業・肩書・(身分)等」は一部省略。氏名は旧字体のまま。『公民(区民)必携』に不参加の村・個人もいます。



子どもたちの身体検査（健康診断）



診療所の志田女医



幼子に声をかける志田女医



大井沢診療所

志田周子女医の事績 ちかこ

志田周子女医は、明治四十三年生まれで大井沢に育ち、東京で医学を学び、大井沢診療所医・村医・小学校医として招聘されます。その三年後に母を病気で亡くし、弟妹の母代わりをしながら、地域の医者としての役割を続けます。やがて、その地道な活動が評価され、戦中には「仙境に咲く女医さん」、「山村の母」女医」の見出しで全国紙に紹介され、戦後には「僻地に生きて二十年 ある女医の一生」「へき地に生きる」のタイトルでラジオ放送でも取り上げられました。

志田女医は、一方で村会議員などの役割をも果たしながら、不十分な医療設備の中、住民のための保健衛生や医療活動に献身しますが、食道癌におかされて、五十一歳の生涯を閉じます。保健文化賞を受賞した昭和三十四年、ある講演で、自分がいなくなることで郷里が再び無医地区となる不安を語ります。父から受け継いだ課題の重さを感じながら、その三年後、彼女は他界することになりました。

写真は志田悌次郎氏より提供。県史資料室所蔵。

寄贈資料紹介

「山形六日町教会関係資料」

昨年六月、千葉県在住の鈴木千代志氏より「山形六日町教会関係資料」(複写)二箱分を寄贈いただきました。「山形六日町教会関係資料」は、明治期から続く山形六日町教会(キリスト教)の「信徒名簿」「記録」「教会日誌」「(金銭出納簿)」「日本基督教大会記録」等、教会活動や所属団体に関わる複写資料綴り八〇冊から成ります。山形六日町教会は、明治二十年に設置された日本基督教会(プロテスタント系)の講義所の一つで、同じ系列では、上山教会・荘内教



現在の日本基督教団山形六日町教会

会・米沢中央教会・酒田教会・新庄教会などが開設されています。複写資料綴りの中で、もっとも古いのは、『一致教会山形講義所議事 第壹号』(明治二十一年一月)という資料です。この記録は、倉長恕の「例言」の後、明治二十年十一月の次の記事から始まります。

牧師押川方義氏山形二来ル
是し我基督教主義ヲ以テ山形
英学校ヲ創立センカ為メナリ、
是ヨリ前キ十月中旬米国宣教師
ゼーピーモール氏モ亦該校
ノ為メ二来ル、恕ハモール氏
ノ為メ二来ル

押川方義は、明治五年に洗礼を受け、新潟・仙台などを拠点に伝道活動を展開し、明治十九年には、「仙台神学校(現、東北学院大学)」及び「宮城女学院(現、宮城学院女子大学)」を創設した人物です。押川は、上山・荘内・米沢中央教会の設立にも関わったとされています。一方、J・P・モール(Mーア)は、ドイツ改革派教会から日本に派遣された宣教師で、来日

して植村正久や押川らと交わりその活動を支援しました。「山形英学校」創立が来形目的にあります。これは、当時の山形県知事柴原和が県会議員や有志にはかり、「山形英学校」を設立するために押川方義を校長に迎えたものです。同校の学科は「英学」のみで、モールらが教授に当たりました。同二十四年には生徒数一三八名に達しますが、校主と知事との確執等から翌二十五年に廃校となっています。

伝道活動については、明治二十年十二月十七日、山形丸万座(小姓町)で五〇〇人の聴衆を集めた基督教演説会が開かれ、これを「山形ニ於ケル伝道ノ手初メ」としています。翌年七月、香澄町に新会堂ができて講義所を移転させます。

『講義所議事』には、日ごろの礼拝・洗礼・伝道の様子や宣教師・牧師・信者の動向が記されています。一方、社会動向を示す記事では、欽定憲法(大日本帝国憲法)が公布された同二十二年二月十一日には感謝祭を開き、翌年も継続したことが記されています。また、同二十三年四月二十五日には、廃娼(公娼制度の廃止、昭和三十一年に売春防止法が制定され翌々年に廃止実現)演説会が山形一致教会堂で開かれ、翌日の山形県信徒親睦会において、山形・鶴岡・米沢に廃娼事務所を置き、三名ずつの委員を選定して各地に部会を設置することを決議しています。

「山形六日町教会関係資料」は、山形県におけるキリスト教布教の歴史のみならず、キリスト教と教育・社会運動との関わりを知る貴重な資料です。(山内 励)

山形県 県史だより 第四号

平成二十七年三月十五日発行

編集・発行

山形県総務部学事文書課分室

県史資料室

〒九九一 八五〇一

寒河江市大字西根字石川西三五五

村山総合支庁西庁舎

電話 〇二三七 八三 一二一五

FAX 〇二三七 八三 一二一六